

一九六五年における序

者たちを得てきているものの、積極的な協力者の数はいまだに僅少である。とはいえこの上なく貴重な存在ではある。

本書の初版は一九六二年に世に出たが、筆者がその後篇を書き終える以前に、品切れとなつてしまった。後篇では前篇で明らかにした事柄を、さらに広げてより完璧にするつもりである〔「訳者解説」参照〕。スペインの歴史を扱つてみれば分かるが、あらゆることが独自で類をみないものである。何にもましてその理由として大きいのは、問題となつてゐる点、単に現象のもつ外見と、そのしかるべき現実とのギャップの大きさだけにとどまらず、後世の歴史家たちが、以前ほどには扱ふことが容易くなくなつたある現実の、さまざまな要求に対して示す自らの好みや習慣の間に、大きな対立・葛藤があるということにもよる。まさにそここそ、長年にわたつて深く打たれた基礎の上に、築かれたそうした魔術的包囲を突破しようとする者にとつての辛く険しい困難が横たわつてゐる。破壊と建設を目指した本書は、日々多くの傍観

私はこの序において、他の書き物のなかで明らかにしていくつもりのある若干の見方を前もつて示すことが有益だと判断した。もつともそうした見方は、（私に残された時間が許す限りとしての話だが）本書の後篇でも幅広く発展させようと思つてゐる。喫緊の問題は、下世話にいうスペインの（没落）といった概念を、衰退したスペインの生の形態と機能がはたしていかなるものだったのかという、真つ当な見方に取つて替へることである。そのことに關しては、しばしば生の外部にある事柄についての説明がなされている（たとえば戦争、人口減等）。ところが人口過剰の土地の住民が實質的には何の生産活動も行つていない反面、人口の少ない小さな国でそれとは逆のことが起きている、といった事実については何ら考慮されていない。戦争はときとして物事にピリオドを打つものだが、別のケースでは出発点ともなりうる。こうした点を鑑みるに、われわれは十六世紀末以来、ますます貧しく、無知になつていつたスペインという国の住人たちがどういつた存在だったのかを、自らに問いたださねばなるまい。われわれは驚異のインディアス帝国が、スペイン人にとつて経済的に見てきわめて無益であつたのはなぜだったのか、その根拠をずっと知らないままできた。スペインという国がヨーロッパの一部であり、地理的にもきわめて近接した存在であつたにもかかわらず、そこからますます遠のいていつたのはなぜなのか、その理由も分からなかつた。こうしたわれわれの無知は、スペインがヨーロッパと常に結びついていたとか、他の西洋諸国と歩調を合わせた生の道筋を

歩んできた、などという誤った見方に固執するかぎり、正されることはない。

いつの日か円の真の中心に至るべく、この種の厭わしい問題をめぐる、窮屈な円の中で思考をめぐらせねばならないし、無思慮で方向性のない堂々巡りを続けてはいけぬ。なぜわれわれが今日においてもなお、外国の文化的植民地であり続けるのか、その原因を白日の下に晒すべきである。このことは決して《魔法使い》の仕業でもなければ、致命的な運命のなす業でもない、そうではなくて、今日スペイン語とポルトガル語を話すわれわれすべての人々が描いてきた生の道筋のなしてきた業なのである。今現在、イタリア人がスペイン文学をより深く究めるために、きわめて貴重なやり方で貢献しているのに対し、一方のスペイン人といえば、その「ラテンの妹」に関して同様のことをしようとはしない。

こうした否定的な側面の裏返しとして出てくるのが、スペイン帝国の偉大さや、十七世紀初頭までに成し遂げられた一連の栄光に満ちた事柄といったものである。しかしそうしたのもすべて血統間の対立と切り離すことはできないのだが、人はかかる対立を前にすると目を閉じて、筆を止めてしまう。とはいってももの、現実というものは他でもなく、まさしくそういう形であったのである。事実、旧キリスト教徒と、ユダヤやモーロの血を引く新キリスト教徒が存在した。スペインの生が引き裂かれた状態にあった証拠として、いまだに彼の地にはセファルディ（スペイン人）が存在している。一六〇九年に追放されたモリスコたちは、十八世紀に至るまでスペインの顔立ち（二つの言葉はよく混同さ

れるが、アンダルシア的ではなく、アル・アンダルス的という意味）をしっかりと保持してきた。こうした三つの血統と三つの生粹主義からなる三つ巴、および一四九二年と一六〇九年の間の緊張関係と分裂を前提としないならば、『セレスティーナ』や『ドン・キホーテ』は存在していなかっただろうし、スペイン帝国もまたあのような形で形作られることもなかっただろうし、経済的に非生産的な存在にはなっていなかっただろう。またスペイン人が十六世紀前半に見られたような、宗教的・哲学的・学問的な文化を発展させることもなかっただろうし、十七世紀の知的衰退や無知蒙昧に陥ることもなかったはずである。こうした要素はいまだにすっかり解消されてはいない重大な障害である。筆者は年月を経るにつれ、かくも基本的な真実が、今日なおまかり通る真実の歪曲や伝説に取って代わっていくはずだと信じて疑わない。

読者の中には、私がスペインに関する自分の見方の全体像をどうして一冊の本にまとめないのかいぶかる向きもあるだろう、かの偉大な文献学者アントニオ・トバル氏の言葉を借りて言うなら「民族としてのわれわれの存在に、突き刺さった棘についての鍵を探り当てようとする」筆者の仕事のことである。また別の読者には、スペイン人の地方主義や国家主義の分析が欠けているというふうに見えるかもしれない（それに関しては後篇において扱うつもりである）。また別の見方では、筆者の歴史的《現実》の分野には、スペイン人の未来に関する予見とか、その構成すら含まれていない点を挙げて、不完全だとする者もある。こうした多くの要求や期待は筆者にとって大きな名譽だが、私のテーマはいまだにぼんやりとした霧の間に漂っている、『スペイン人』

と《スペイン》という二つの言葉の間に、客観的で納得のゆく相関性を提示することに収斂してきている。いまだに存在しているとみなされていない事柄を新たに発見するときには、前もって想像力を発揮しなければならぬし、新たな見方が「疑いの余地のない」ものだとして取ったならば、すべてを「資料的に陳述しただけの不毛な文面に」従わせるようなことはしてはならない。そうしたところ「かの歴史家（カストロ）」を逆上させる態度³なのである。

スペイン人が何者であり、いかにしてそうなったのかという筆者の考え方は、もはや直接的かつ個人的に攻撃の対象となることはなくなった。かつてわんさと私に向けられたナイーブな批判については、時が経つにつれ、そこには根拠がないことが明らかにされた。とはいえ、レコンキスタ以前のイベリア半島に暮らしていた人々をスペイン人と呼ぶことは、正確ではないという現実から出発して、新しいかたちの歴史を書くこととした者はひとりとしていない。それよりもさらに幅の広い方向転換が求められるのは、モーロ人やユダヤ人の（民族ではない！）血統のもつ積極的かつ決定的な存在を、将来の歴史記述の中に含めることが必要だからである。というのも、スペイン問題が《民族》ではなく《血統》の問題だということを受け入れることに抵抗する者が、際立って多いからである。今日では「民族」という言葉の定義は、アカデミアの辞書が言うように、「肌の色および他の性質によって」區別される人々のことを指しているにすぎない。本書九三―九四頁に提示されたテクストは、もはや異議申し立て不能なものであり、次のロマンセのそれと同様、宗教的な血統とか血筋のことを言い

表している。

私はモーロの犬といっしょにいます、連中の血統に災いあれ
なぜって私に自分のキリスト教信仰を棄てると言うのですか
ら³

血統間の社会的で密接した対立関係は、伝統的なロマンセーロにもずっと顕在化していた。近代においては、一八七七年にガルドス (Galdos) が『グロリア』(Gloria) のなかで次のようなことを書いている。因みにガルドスはスペインの歴史ではなく、年代記の因習の下に潜むものを天才的に言い当てた作家である。

グロリアは尋ねた、「ああ私の神様、どうしてあなたはこんなことをなさるの？」するとダニエルは憂鬱そうに答えた、「神様はそんなことはなさらないさ、われわれがいま触れているのは、自分たちこそ絶対的真理を掴んでいると思ひ込み、ペリシテ人の時代のように、血統の掟を守り通している、こうした完全無欠の社会の生み出した産物なのさ」

〔全集〕アギラール版、第一巻、五六一頁（傍点引用者）

十九世紀になると血統システムは、カトリック両王の墓碑銘（本書二二六頁参照）が書かれた十六世紀ほどの活力はなくなっていたが、それでもその効果は、他の宗教はいかなるものであれ、排除する非寛容的なカトリックを唯一の信仰とする事実のなかに示されていた。この『グロリア』に見られる血統に対する言及は、

もちろん小説的機能をもったものであり、歴史的・社会学的な機能をもつものではない。ガルドス小説のセルバンテスとのつながりがはつきり見て取れるのは、人物が本音でしか生きていくことができない、ということである。そのことが人に生きる意欲といったものを与えている。ここでは騎士道小説の機能は男女の愛が果たしている。異なる血統同士が両立しえないことは、グロリアとダニエルという男女が、現実という名の壁にぶち当たり、それに撥ね返されて越えられないことに示されている。

こうしたスペインの生的内的骨組みを外気にさらすことによつて、そういうことをする人および可視的な事実だけを眺めている人々は不快な思いをする。それは、そこにかつてあつたものと(何らかの形で)現にそこにあるもの、またないように見えていたものが曝き出されるからである。人は視点とか価値規範といったものが混乱をきたすと、衣服を剥がされたような気分になり、手元にあるどんなものでも身に纏いたいと願う。無分別な人間の過剰な好奇心によつて、今ある《現状》をかき乱されるとして、そうした人物をおぞましく思うのだ。反発心からスペインだつて「他のヨーロッパの国々と同じ」国なのだと主張しようと躍起になる。最も怪しからぬ、最も情けないヨーロッパ西洋との間にあるギャップといえども、十九世紀においてはいくつかの共通分母に還元された。つまりそれはアンシャンレージュの崩壊と機械文明、ロマン主義といったものである。それと密接に関連する状況として、言及されるのが「スペイン民族の特殊な国民性」といったものである。それは今までいかなる者によつても、内部から分析されたことはなく、理解可能な構造として、はつきり目に

見えるかたちで示されることもなかった。

筆者のいうスペインの歴史のプロセス(一部はヨーロッパ的であり、一部はそうではない)の《骨組み》というものは、伝統主義者や《幸せな資産家》にとつて心をかき乱すものであるが、それは存在するすべてのものの方向を変えたいと切望する者たちにとつても同様である。変化というものが、現にそこにあるものから出発せねばならず、それを變えたいと願う人々にとつて可能な手段から出発せねばならない、ということがあまり考慮されていないくらいがある。つまりそれがどんなことであれ、《スペイン人》とともになされねばならないのである。スペイン人という存在は二つのかたちでわれわれの前に姿を現す。受身的な従順さに慣れ親しんだスペイン人と、自分の意志で行動するべく自由闊達に振舞うスペイン人である。前者のケースでは集団的生の基盤や骨組みを白日の下に曝け出したとしても、さほど重要なことではない、なぜならば集団的生を営むために求められるのは唯一、従順さだからである。しかし集団的生に広い出口が用意され、人がそこから歩き出すことを許されるならば、すべて事情は変わってくる。

何世紀も前からスペイン社会がわずらっている欠陥や裂け目に関して、夥しい数の書物が著されてきた。ところが、当の社会がどういった存在で、どのようにして形成されたかを、はつきり明らかにして理解させようと意図したものはごくごく限られていた。あたかも気性や性格が、単にそれだけでそうした特徴をもった人間たちのすべてを説明できるかのように、スペイン的《国民性》とかスペイン人の心理について語られている。ならば借問しよう、

《スペイン人》という言葉を発表するとき、いったいそれは誰のことについて言っているのか？ カステイリヤ人、ポルトガル人、カタルーニヤ人という言葉は、自らをそうした存在だと認識する者たちのこと、常に動いていて定まるところのない人間的現実のことを指している。自分たちの道筋のもつ広がりや、その方向を指し示す指針によって、われわれは彼ら特有の生き方の《かくあり続ける》様態が、何なのかを推測することができ。民族というものは、自らが何となく存在し続けているという意識に対し、あるいは活力もなければ《生存能力》もない要求や嘆きに対し、それをよしとして自足するとき、歴史から遠ざかってしまう。そのとき、民族は筆者が《実存病》(existentialitis)と呼ぶ病に罹り、歴史にとつての課題であることをやめてしまうのである。

誰でも間違ふことはある。したがって私たちの犯すかもしれない間違いが何なのか、正確に見定めることが大いに役立つ。筆者の問題は、何にもまして、スペイン的なるものの根源を探ることであり、その豊かな広がりについて探ることではない。本書、および他の著作のテーマは、政治でも宗教でもなく、経済でも、カタルーニヤ主義でも、抑圧的な中央集権主義でも、技術などでもない。親切にも筆者に体系だった、よく練られた著作を著すように助言してくれる(かかなりの数の)人々は、もちろんそれは私のせいなのだが、私の関心が(たとえば)経済のスペイン的なるものにあつて、スペイン人の経済そのものにあるわけではない、という点に気づいていない。もしそうした行動をとらなければ、われわれは問題が何なのか示すこともなく、問題の周りをぐるぐる見境もなく回り続けるだけに終るだろう。気の短い人々は、こう

したスペイン人にとつての大問題の最も決定的な側面を回避してしまう。したがって私はイスラム教徒やユダヤ人、それに生粋主義者間の対立について語らねばならないのである。つまりその存在の内部から血統的な分裂をきたし、互いに辛い目に会わせながらも、抑圧的な状況の中で、腕で押し合いながら道を切り開いていったスペイン人たちの行動を緊迫させた(あるいは麻痺させた)、もろもろの力のことについて語らざるを得ないのである。こうした枠組みはそれをさらに広げていく必要があるだろう。それはいかなる計画や想定であれ、未来に計画を立て、未来を想定するために避けることのできない核心だからである。

今述べたような基本的な考え方を、すでに知られていた知識などとみなすことはできなかった。なぜならばそうした真実は、数学的に証明することなどではしなないからである。したがって(こうした事由により)「最初から反感という色眼鏡をかけて」議論しようとする者たちのことを、しっかりと念頭に置かねばならなかった。本書における事実と原則の問題は(その目的は実際的なものであり、率直にいつて学識にあふれたものでもなければ、高度に哲学的なものでもない)、若干の補完的作業の助けをもって、自らの道を切り拓いていかねばならなかった。最初のそれは『スペイン人の起源・実体・存在』であり、一九六五年に『スペイン人はいかにスペイン人となったか』というより正確なタイトルになって、マドリードのタウルス社から出版されることになっている。善意から読まれる知的な読者諸氏にとつて、イベリア人やケルト・イベリア人をスペイン人に先立つ存在(萌芽的スペイン人、とでも言おうか)として排除することは困難だと見て取った私は、

今述べたこの書（直に日の目を見ることとなろう）のなかで、かくも抵抗の大きい障害物を排除することを試みた。集団的生というのは単に生物学的継承の結果であるわけではない。そうした生は、その本来の名前（ローマ人、西ゴート人、カタルーニャ人など）が与える意識によって制約された形態を通じて、徐々に形成されていくものである。そのように特定化された集団の各々の内部において、集団的意識は自分たちの間近に起きた、過去の瞬間や状況をしっかりと把握している。それは個人個人が自分の青春時代や幼年期のことを内部で把握しているのといっしょである。彼は自らの両親についても知っているし、もし先祖たちが有名人であつたならば、彼らについても知り得るかもしれない。とはいへ、そうしたものはひとつとして現存しているわけでもなければ、自己の生としての人格に影響するものでもない。個人の生というのは、快いときも不快なときも、顕在化している何かかけがえのないものの記憶として、人格の中で常に脈打っているものである。さて、話を戻すと、ケルト・イベリア人は、その程度の如何を問わず、スペイン人の遠い先祖であることには間違いないだろう、しかしだからといって、スペイン人の幼年期や青春時代というわけではない。あることに（ついでに知る）ということ、それを目の前にしっかりと（見据える）ということとは別問題である。《スペイン人》はカステイリヤ人、カタルーニャ人、アラゴン人、アングルシール人をそうした存在として（見据える）べく、学ぶ必要はさらさらない。ところがケルト・イベリア人は、想像をたくましくした空想的書物のなかにおいてのみスペイン人であるにすぎない。

筆者が『葛藤の時代について』を著したのは、将来、今日まかり通っている不正確な歴史よりもましなスペイン人の歴史を練り上げようと考えている者たちに対して、前もって土地を耕しておいてやろうという心積もりからである。その著作において明らかにしたかったのは、血統間の対立というものが、（今日までの）スペイン文明の道筋の全体に影響を与えたという点である。またそれが結果として、人が新キリスト教徒であるか旧キリスト教徒であるか、その違いによって、特定の知的労働ないしは物質的労働を涵養する傾向を生んだという点である。スペイン系ユダヤ人の血統に属する作家や学者の数は、毎年のように増加を見ている。十七世紀における文化活動が停滞したこと、そして十八世紀、十九世紀に（他の西洋諸国と比較した場合）その水準が取るに足らないものであつたことは、旧キリスト教徒たちによって加えられた、無意識的な常習的圧力を抜きにしては理解しがたい。それとこの、十六世紀以降、文化的仕事は「異端審問と関わる」と（ソル・フアナ・イネース・デ・ラ・クルス [Sor Juana Inés de la Cruz] が後の書き記したこと）とされるか、さもなければ生粹的な旧キリスト教徒である身分を汚すものだったからである。そのせいでガリシアのみならず、カタルーニャやマドリッド、アングルシールでも文化的停滞の痕跡が残されたが、そのことにハプスブルク家もブルボン家も直接的に関与することはなかった。十六世紀がどういふ時代であつたか知ることを妨げる別の障害は、『セレスティーナ』以降の文学を、単にジャンルのな視点から取り上げようという傾向がある点である。そういう行動をとる人々は、そうすることで、スペインが人文主義、ルネサンス、バ

ロックなどを有しているがゆえに、他と同様、ヨーロッパの一国であるということを中心とした。拙著『文学的闘争としての《セレスティーナ》』（一九六五）は、この天才的作品が一九九二年以降の、とりわけスペイン系ユダヤ人の人間的状況に依じて書かれたものであることを明確に示した。十五世紀から十七世紀に至るまでの、ファン・デル・エンシーナ (Juan del Encina) の演劇からピカレスク小説や、形式上セルバンテス小説を用意することになる新たな文学形式の出現は、そうした状況を抜きにしてはとうてい説明不可能である。かくも反感を催させるような状況から出発して、スペインの文化の諸相と向かい合わねばならないことが、怖気を振るうような厭わしいことだと考える者たちにとっては、自分たちの好みに合わせて、決まった型にはめ込むべく、事実を歪曲したり、偽ったりすることは大いに理にかなっていないように思われる。カステイリヤにおけるコムネーロス (Comuneros) の乱に対する、判断の仕方ひとつを見ても、彼ららしさがよく現れている。つまりあれはヨーロッパの思潮や思想と歩調を合わせた民主主義的な蜂起であったとはするものの、ユダヤ系スペイン人があのような無秩序な暴動に関与したことなどきっぱりと否定するのである。そのことに関し、前述の『文学的闘争としての《セレスティーナ》』では、一五二一年四月二十六日にセビーリヤの異端審問官たちによって皇帝に宛てて書かれた文書を付け足そうと思っている。それは「カステイリヤの騷擾を引き起こした張本人は、コンベルソたちであり、異端審問所の裁きに関わる〔つまり、恐れを抱く〕者たちであることはたしかでございます」というものである。スペイン人社会学者はスペイ

ン社会と向き合う際に、(三四〇年も続いた) 異端審問のことを考慮に入れないのである。

筆者はスペイン史に目を閉じ、何世紀かを歴史から切り取ろうとする傾向(本書八六頁を参照) 対し、その時代を暴き出そうと考えた。実際にあったことをないことにすることもできないれば、単に分かったこととしてすませることもできない。歴史的次元の中で(知る) というのは、現時点において己自身の過去の(痕跡) を感じ取ることに等しい。スペイン人のケースの場合、今日という時間は、カステイリヤ的、レオンの、アラゴンの、ナバラの状況と(溶け合って) いる。筆者はブルボン朝とかハプスブルク朝などのことを指しているわけではない。こうした王家はトラスタマラ王家やアラゴン王家のごとく、血統の水平的体系に従ってすでに構成されていた人々の上に君臨したものである。他の西洋諸国のごとく、単に垂直的体系に従って君臨するだけではなかったのである。確固たる始点から始めようとするれば、十世紀以降、キリスト教徒住民はモロ人とユダヤ人と混在して暮らしてきた。このことは比率に多寡はあるとしても、常にその結果のうちに現れている。王国同士の併合といったことがあったにもかかわらず、すべてのキリスト教王国の内部は、三つの生粋主義があったせいであらうと分断されてきた。一六〇九年においてもなお、アラゴンはまさにモリスコたちがいたせいで、カステイリヤとは異なる状況に置かれていた。一方のユダヤ人たちは、文化的に見ると、一四九二年以前に彼らを追放したカタルーニャやアンダルシーア以上に、カステイリヤに深く根を下ろしていた。

カステイリヤやアラゴンにおけるスペイン系ユダヤ人、後に